
死、いずくんぞ生の輝きを知らんや

ウルフガイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死、いずくんぞ生の輝きを知らんや

【Nコード】

N8849U

【作者名】

ウルフガイ

【あらすじ】

殺す力に囚われて悪平等となった一人の男の子。
安心院とも同等である、彼の名前は那由多玄杵。

(前書き)

ムシャクシャしてやった。
今は反省している。

「久しぶり」

「……嗚呼、安心院か。死せる私に何の用か？」

暗い暗い地下深く。

箱庭学園の地下に存在するその部屋に、一人の女が現れた。

その女の声に答えたのは幼い子供の声。

しかし、幼い子供の声にしては有り得ないほどに深みを感じる声だった。

小さなその部屋の中心には巨大な棺桶が配置され、その上に腰掛けた少年が、部屋の入り口に現れた女へと視線を向けていた。

「誘いに来たんだよ。表に出る気は無いかな？」

安心院は子供へと問いかけた。

その子供は自分の後ろへと垂れ下がる真つ黒な髪を揺らしながら安心院を見上げた。

そしてほんの少しだけ間をおいて、言った。

「……そうだな。貴様が私を誘うというのなら余計に何かあるのだろう。まさか私を騙すような真似はもうしないだろうからな」

「当然だね。そんな事しても意味がない」

「事実か？ 自覚が無いだけで恐怖かも知れんぞ。前に貴様が私をペテンにかけた時、その身に余る力を千は殺してやっただろう」

からからと子供が笑った。

安心院は答えない。恐怖などではないが、殺されたのは事実だ。機嫌を損ねてそれこそ力を殺しつくされたらたまらない。

目の前の相手も自分と同じかそれ以上生きている人間だ。そう簡単に怒りはしないだろうが、目の前の相手には安心院とはいえ注意をする必要があった。

棺桶から降りて、安心院へ近づきながら子供は言った。

「私を利用する気ではあるまいな」

安心院を見つめる瞳はどこまでも黒い。そこが見えない深淵をたたえる海のような。

しかしその目は確かに安心院を捉えていた。

それに対する安心院も、どこまでも平等にモノを見る瞳で子供を見る。

——その目には、その人物が確かに『個』として写っている。

「僕は『那由多玄杳^{なゆた げんよう}』には嘘は吐かない。君も『安心院なじみ』をもう殺さない」

「呵々、悪い。そうであつたな。確かにそうだった。許せ」

あつけなく、那由多玄杳と呼ばれた子供は目をはずした。

一つの難所を乗り越えたと思い、安心院は少しだけほっとした。

ありとあらゆるものを殺す能力。

それが、那由多玄杳の持った一つスキルであり、安心院ですら

恐れるスキルだ。

幼い頃に、彼はその能力を制御できなかった。嫌いな者を殺し、好きな事をするためにそれを使った。当然、周りの者たちは彼を恐れて殺そうとした。

その時に、反射的にだろう。

彼は自らの中から『死の可能性』を殺しつくし、訪れた『危険』を殺しつくした。

彼に訪れるあらゆる死は去ったのだ。

老いた先にある死という可能性も、あらゆる外傷による死の可能性も、彼は全てを殺しつくした。

その時、彼の時はそこで止まった。

それ以来、彼は成長することも無く、まるで悟りを開いた仙人のように虚しく時を過ごしている。

ずっとずっと、昔の出来事だ。

安心院が那由多とあったのは、彼女が箱庭学園を設立してからすぐの時だ。

彼女は箱庭学園に人材を必要として那由多を誘い、些細なことで彼に嘘を吐き、そして彼は腹を立てた。

那由多は悟りを開いたかのように普段はおとなしいが唯一つ、嘘をつかれる事だけは嫌いだった。

その時に安心院は殺されかけ、あらゆるものを問答無用で殺すという那由多の能力を体験させられた。

彼女の持つ能力を片っ端から殺されていき、10秒も経てば彼女の持つスキルは千ほど減らされてしまっていたのだ。

安心院なじみが、那由多玄奘を敵に回さない、自分と同等と見ている理由の一つがそれである。

「それでは話を聞こうか。安心院。私が下にこもっている間の話も聞かせてくれるか」

「僕もしばらく封印されてただけだねえ。まあいいよ」

しかし最も大きな理由としてはこれだろう。

那由多玄杳は、数百年の時を生きて安心院とはまた違った人の見方を
する悪平等なのだ。

死を超越した人外であり、殺せないものなど存在しないが故に人を
人と見れなくなった悪平等。

スキル以上にそれこそが！

安心院が那由多を同等と見る理由なのだ。

「ところで、僕の封印を完全に消してくれないかい？」

「できるがやらぬ。自分で何とかするのだな」

封印するしかない自分を殺すことのできる人間と、ヒヤヒヤする関
係を続ける事も面白い。

安心院の中には、いつしかそんな考えも浮かびはじめている。

久しぶりに会った友人同士、悪平等二人はたわいの無い会話を続け
るのだった。

「……………」

ちなみにもう一人、ただそこにいるだけの不知火半纏。
会話に参加することもせず、目を合わせようとすることも無く。
まるでただそこにあるモブキャラのように、彼はそこへと佇んでいた。

もちろん、那由多玄杵は不知火半纏へと話しかけない。

那由多は爺を当に超える年齢の癖に、子供の姿で子供のような嫌がらせをする男でもあった。

「それより、ここは暗いから表に出ない？」

「確かに暗い。私も飽きたところだ」

一瞬で彼らは箱庭学園の校舎屋上へと移動した。

安心院は『アリバイブロック腑罪証明』を使い、那由多は屋上への距離と過程を殺して移動した。ついでに不知火半纏は、誰が言うでもなく誰に言われるでもなく、自然と彼らの後ろに立っていた。

「明るいな。久々に見ればいい世界だ」

「それはなによりだね」

ずっと地下にいた那由多は、屋上から眺める景色に目を細める。
太陽の光を浴びるのも、ずいぶんと久方ぶりだったようだ。
ほんの少しだけ笑顔を浮かべた彼に、安心院は問いかけた。

「それで、君はどうする？」

フラスコ計画に黒神めだか、今までにあった事は既に彼へと教えて

あった。

それを聞いている間、那由多は特に表情を浮かべてはいなかったが、一応答えを聞く必要があった。

那由多をしばらく箱庭学園を眺めていた。

未だに昼の箱庭学園では、生徒たちがグラウンドで運動をしたり、校舎の中で活動を行ったりしている。

何かを感じているわけでもない虚しい視線でそれらを眺めて、那由多は口を開いた。

「とりあえず安心院、しばらくの間はお前と一緒にいてやろう」

「それは何より——彼にも挨拶はしておけよ？」

「また後でな」

安心院は半纏を指差したが、那由多は軽く流した。

始めに決めたスタンスは変えないままで接するらしい。

たった二人きりの悪平等、生徒会が把握する彼ら二人へと、三人目が加わった瞬間だった。

この全てを殺す力を持った悪平等が何を為すのか。それは誰にもわからない。

（後書き）

あとがき

たまにはチート能力を書くのもいい事だ。

スキル名：未定、とりあえず『^{デスマーチ}万死一笑』

ありとあらゆるモノを殺す能力。

描写内では『死』と『距離』と『能力』、『過程』も殺すことができる」と判明している。

全てをなかった事にするどころか、全てを殺しつくしてしまう可能性があるという意味で世界を消してしまいかねない能力。

『時間』や『事象』や『災害』までも殺すことができるとか。

あくまで彼の中に存在する『死』を殺し、外部からくる『死』の可能性を殺したただけなので、相手に問答無用で『死そのもの』を与える能力には殺されるかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8849u/>

死、いずくんぞ生の輝きを知らんや

2011年10月9日22時32分発行